

氏名	関谷 由美子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	人博 第 64 号
学位授与の日付	平成 26年 9 月 18 日
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題名	日露戦後文学としての夏目漱石
論文審査委員	主査 大杉 重男 委員 飯田 勇 委員 猪俣 ときわ

【論文の内容の要旨】

博士論文要旨

漱石は日露戦争後に登場した作家である。そして日露戦後の日本社会の現実を、まさに激増しつつあった新中間層の知識階級の生活感覚及びその意識性に焦点化し、絶筆『明暗』に到るまであくことのないさまざまな実験を繰り返した。その文学上のモチーフは、二葉亭四迷の『浮雲』や、森鷗外の『舞姫』以来、〈私性〉を描くことに集中してきた日本近代文学が当初から孕んでいた問題を徹底化した、ということが出来よう。前近代社会は、身分制度によって社会的な立場や役割が固定的、明瞭であり〈人間の関係〉も制度に伴う一定の枠組みが暗黙の裡に作用するため、一定のマニュアルに沿うように人間の意識も自ずから身分の枠内に抑制されていた。しかしこうした堅固な身分制度の枠が取り外された時、換言すれば対人関係のマニュアルが失われた時、人間の〈意識〉及びそれに伴う〈人間の関係〉はどのような相貌を帯びるであろうか。士族と農民、主人と使用人、あるいは姑と嫁など、判りやすい役割や立場の関係は原理的にすでに破産している。あるのは何時〈魔〉的なものに変貌するかも知らない〈個人〉(他者)と〈個人〉(他者)の関係である。

漱石の文学は、日露戦後に輪郭を露わにする資本主義社会のこうした〈意識〉の逸脱と、それに伴う人間的退廃の諸相を、それを表象するにふさわしい主人公たちを通して極めて分析的に描いたと言っている。『三四郎』の美禰子、『それから』の代助、『彼岸過迄』の須永、『行人』の一郎、『心』の〈先生〉、『道草』の建三、『明暗』の津田などの漱石的主人公たちのすべてに漱石が日露戦後に身を以て体験した、社会的心理状況を見出すことができる。具体的に言えば、さまざまな局面において〈それ自体が追及されること〉、すなわち無償性が失われ、それ自体が目的であるべき行為や人間の関係は、ことごとくこれらの主人公にあつては自己を利する他の目的のために流用される。しかもかれらは無意識のうちにそうしてしまふ。『三四郎』の登場人物広田によつて名づけられた〈無意識の偽善〉である。しかしこれらの意識の在り様は、何と云つても近代社会であればこそ出現した、という意味で斬新な人物造形であつたことは疑い得ない。〈取りとめない人間の意識の全局面〉(『作家の態度』)を描くのが未来の小説の使命であると主張した漱石の自信もそこにあつた。小論は、漱石のテクストが追尋した、資本主義社会の価値空間に生きるこれらの中間層の知識人の意識が織りなす逸脱・過剰・隠蔽・犯罪性の諸相を析出しようとしたものである。

また、近年「欲望の現象学」(ルネ・ジラール)、『男同士の絆』(イヴ・ド・セジウイック)などが明らかにしつつあるホモソーシャルな欲望が、近代社会を推進させた原動力の一つであつたことを漱石ほど知悉していた作家も無い、と思える。小論は、この同質性の欲望のユート

ピア性とその挫折と解体の諸相が、「三四郎」「それから」「門」「心」などに緻密に表象されていること、そしてそれが近代国家が強いる性体制を相対化する視座であることを明らかにし
たつもりである。